

〈一般研究課題〉 昭和前期北川民次作品の自然科学的調査と修復研究

助成研究者 愛知県立芸術大学 白河 宗利



昭和前期北川民次作品の自然科学的調査と修復研究

白河 宗利
(愛知県立芸術大学)

Technical Studies of a Work of Tamiji Kitagawa in his Early Days and its Restoration Works

Noriyori Shirakawa
(Aichi University of the Arts)

Abstract :

Before treatment of “A boy at the Bible Redding” by Tamiji Kitagawa, a series of basic investigations from the work, i.e. visual and optical observations, radiography and pigment analysis using X-ray Fluorescence, were done. The support material is a jute cloth with coarse mesh and be coated with white color, of which unconfirmed pigment can be lead white. The coat is found only on the surface side of the painting. Uses of white pigment, as a simple hue or a blend element to make pale or bright color, are found from various parts of top layers of the painting. The white was zinc oxide or zinc white.

The restoration works were done to respect the original appearance and results of this pre-survey.

1. はじめに

本研究の主たる目的は、名古屋を中心に活躍した画家、北川民次(1894-1989年)のメキシコ滞在期作品—《聖書を読む少年》(1934年)(公益財団法人かみや美術館蔵)を自然科学的手法を応用して調査研究し、技法材料、保存修復の観点から学際的に解明するとともに、上記作品の修復を行うことである。

本稿は、《聖書を読む少年》の自然科学的手法を用いた作品調査と修復の報告である。

2. 作品調査から作品修復へ

まず、研究対象作品について、自然科学的手法を用いて作品調査を行った。

調査方法は、全図及び部分の高精度撮影、デジタルマイクロスコープ撮影、側光線撮影、紫外線蛍光撮影、赤外線撮影を行い、さらに、非接触の方法(携帯型蛍光X線装置)により、使用された絵画材料の成分分析と作品全体のX線写真の撮影を行った。

これらの作品調査の結果に基づき、データの解析を行いながら対象作品の修復に必要な技術に関する計画(修復計画)を立て、実際に作品修復を行った。

【作品全図：修復前】



北川民次 作 《聖書を読む少年》(1934年) 61.0×46.0 cm

【作品概要】

北川民次のメキシコ滞在は15年におよぶが、本作は帰国する2年前の1934年(昭和11年、40歳)にタスコで描かれた作品である。この作品は、「メキシコ時代の北川民次展」(飯田画廊、銀座、1981年)で展示された。同時期に北川自身が次のように回想している。

「村の教会で雑用の仕事をする少年はセラ・フィーノという名だった。仕事の合い間に教会の片隅でよく本を読んでいた。少年の手をしている本は聖書の教えを短縮した書物(カテシズム)である」(「作家の思い出」『KAMIYA MUSEUM OF ART』カタログ、かみや美術館、1984年4月)

■ 作品裏面／側面の目視観察

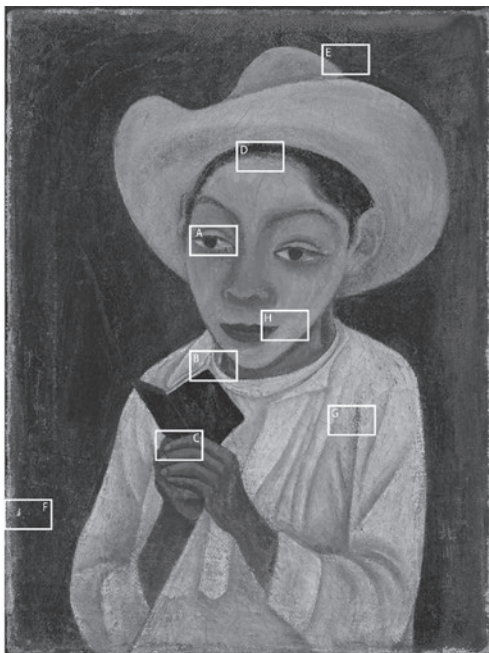
表面からも見てとれたが、かなり荒目の画布を使用していることがわかる。珈琲豆を入れるような麻袋を画布として利用したようである。画面裏面には大きな染みが見てとれた。

また、半透明の黄色がかった地塗り塗料と思われる白色の層が見られた。その層より下層に「1 5 3 8」と読み取れる黒色の表記があった。

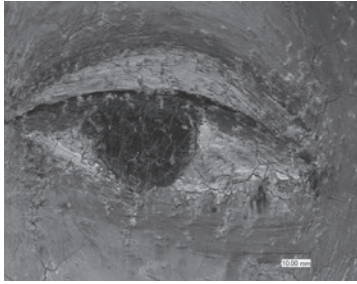
作品側面の張りしる部分は、地塗り塗料が塗布されていないと判別された。



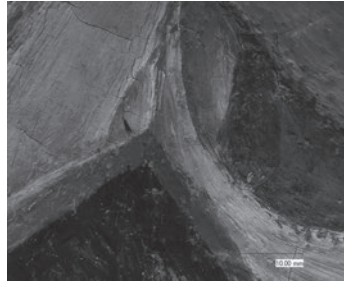
■ デジタルマイクロスコープによる観察



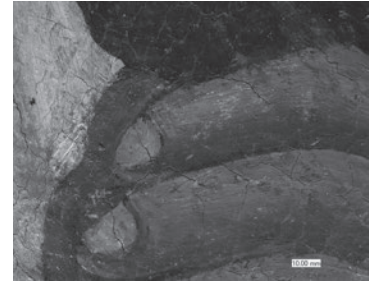
観察部分	
A	眼／画面左：5倍・10倍
B	聖書／右上：5倍・20倍
C	指先：5倍・20倍
D	額：5倍・20倍
E	帽子・背景／右上：5倍・10倍
F	背景／左下：5倍・30倍
G	衣服：5倍・20倍
H	顔／唇横：5倍・40倍



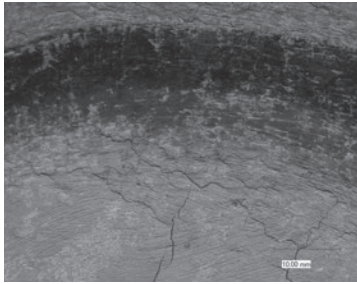
観察部分 A : 眼／画面左 (5倍)



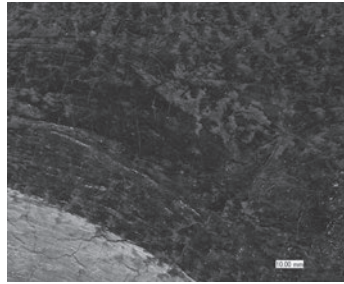
観察部分 B : 聖書／右上 (5倍)



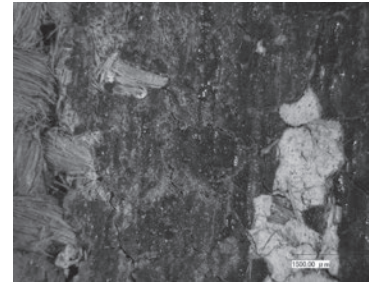
観察部分 C : 指先 (5倍)



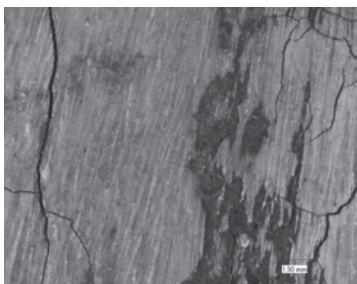
観察部分 D : 額 (5倍)



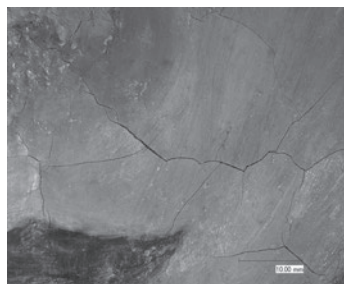
観察部分 E : 帽子・背景／右上 (5倍)



観察部分 F : 背景／左下 (30倍)



観察部分 G : 衣服 (20倍)



観察部分 H : 顔／唇横 (5倍)

【所見】

いずれの写真にも絵具層に大小さまざまな縦横の亀裂が入っていることが観察できる。眼の描写部分と額と髪の毛の境界部分は、他の顔の描写部分より荒目の画布の凸部分の露出が見てとれることから比較的薄く描かれていることがわかる(観察部分:A、D、H)。人物が持つ聖書の描写からは、表紙部分の黒色が側面の赤い部分の下層にわずかにはみ出していることなどが判別でき、描写手順がよく観察できる(観察部分:B)。帽子と背景の境界部分、衣服、背景の観察では、絵具層の凹部分に濃茶色や薄茶色の沈着が判別でき、これはワニス層の光沢の可能性が考えられる(観察部分:B、F、G)。指先部分の描写では、比較的白色に近い色(爪、衣服)を肌の色の上層に描いたことなど描写手順がよく観察できる(観察部分:C)。画面左下の側面に近い背景部分の観察からは、絵具層が剥離し地塗り層の白色が露出していることが判別できた。このことから地塗り層が白色塗料であることがわかる。また、画面裏の目視観察でも見てとれたが、作品側面の張りしろ部分には地塗り塗料が塗布されていないことが観察できた(観察部分:F)。

■側光線写真



■紫外線蛍光写真



■赤外線写真



【所見】

■側光線写真からは、画面全体に亀裂が観察できる。支持体の伸縮に起因するものと考えられる。大きな亀裂は人物部分に集中し、細かい亀裂は人物を囲む背景に現れている。これは絵具層の厚さの違いによるものといえる。人物描写に使用されている絵具は背景に比べ厚塗りであり、衣服のしわや折り目に沿って絵具が盛り上げられていることがわかる。

■紫外線蛍光写真では、画面全体に蛍光反応がみられ、ワニス層が塗布されている可能性が高い。これは部分的な溶剤テストでも反応があった。人物の衣服からは、やや青みを帯びた蛍光反応が確認でき、ジンクホワイトの使用が推定される。人物の額に見られる色調の違いは、ワニスの塗りむらによって生じたものと考えられる。

画面右下、サイン部分の蛍光は、褐色絵具にジンクホワイトを混色したためであると推測される。

■赤外線写真では、下層の下素描はほとんど確認できなかった。右頬にやや確認できる程度であり、この線描は通常光下で丁寧に観察しても肉眼で見ることができなかった。画面上の右首に輪郭線の描き直しのような黒色線が確認できる。通常光下で見られた聖書部分の鮮明な赤色部分は白く写り、これはパーミリオンの使用が推定される。背景全体が暗く写っていることは、炭素系黒色絵具の使用が主であることに起因すると推定される。

■ X線写真

【所見】

少量のシルバーホワイトを含む白色塗料を薄く全面に刷り込むように施してある。仮枠に麻布を張り、下塗り加工をした後に、現在の枠に張り直して制作したと予測される。これは、左辺の布目と現在の釘位置の差があることから分かる。少年の白い服や帽子顔などの白色像が鮮明であり、シルバーホワイトの使用が予想できるが、蛍光X線分析(XRF)の結果は $Zn > Pb$ を示している。この分析は主に画面表層のみをとらえるので、表面下部に含シルバーホワイトの明暗描写があるはずである。X線像では額と帽子の間に幅広く暗い部分(髪)があるが、実作では左半分帽子で隠れている。制作過程で構図変更をしたようだ。この部分のXRFが主に Zn を示すのは、ジンクホワイトで仕上げの調色をしたことを示す好例である。帽子の右半分を見ると、当初は無帽の少年像だったようだ。主要な輪郭線がすべて暗い像を作っている。透けて見える支持体の色を含めて暗色の下描き線を生かす油絵本来の技法に留意している。また、両手と聖書の位置も加筆・修正がある。



■携帯型蛍光X線装置による分析



調査風景：携帯型蛍光X線装置

測定箇所			検出元素	主な推定顔料
記号	描画内容	色味		
A	背景	黒(暗褐色)	Zn, Fe, Ca	褐色系土性顔料、黒色顔料、マルスバイオレット
B	帽子	白・黄	Zn, Fe, Pb Ca	ジンクホワイト、シルバーホワイト、黄褐色系土性顔料
C	髪	黒(濃紺)	Zn, Fe, Cr, Co, Ca	褐色系土性顔料、オキサイドクロム、コバルトブルー、黒色顔料
D	額	白	Zn, Fe, Ca,	ジンクホワイト、シルバーホワイト
E	眼	黒	Zn, Fe, Ca	褐色系土性顔料
F	眼	白	Zn, Fe, Ca	ジンクホワイト、褐色系土性顔料
G	頬	肌色	Zn, Fe	ジンクホワイト、黄褐色系土性顔料
H	唇	暗赤褐色	Zn, Fe, Hg, Ca, Pb	褐色系土性顔料、バーミリオン、シルバーホワイト
I	聖書(右)	赤	Zn, Fe, Hg	赤褐色系土性顔料、バーミリオン
J	聖書(左)	褐色(暗)	Zn, Fe, Hg	赤褐色系土性顔料、バーミリオン
K	聖書(表)	黒	Zn, Fe, Ca, Pb	褐色系土性顔料、シルバーホワイト、黒色顔料
L	爪	白	Zn, Fe, Pb, Ca	ジンクホワイト、シルバーホワイト
M	手首(右)	褐色(暗)	Zn, Fe, Pb, Ca	ジンクホワイト、褐色系土性顔料、シルバーホワイト、黒色顔料
N	服	白	Zn, Fe	ジンクホワイト
O	サイン	赤褐色	Zn, Fe, Ca	ジンクホワイト、赤褐色系土性顔料
P	背景	黒(暗褐色)	Zn, Fe, Ca	褐色系土性顔料、黒色顔料

※C (炭素) に関しては、軽元素であるため検出できない。黒色は炭素系顔料であると考えられる。

【所見】

この分析では画面に径3ミリ程度の範囲にX線を当て、照射範囲内にある顔料の構成元素を検出する。このため、ときには目的外の隣接範囲のデータが含まれるので、目視での補正が求められる。

全ての測定箇所からZn(亜鉛)が検出された。これはジンクホワイト(ZnO)と考えられ、地塗り(白)に起因するものだろう。X線写真では鉛(Pb)と思われる淡い像があり、下地は薄い鉛白層の上にジンクホワイトを重ねた2層構造を持つと考えられる。蛍光X線では表層しか確認できない。なお地塗りを含む白色の随所でCa(カルシウム)が検出できた。X線結晶回折分析は未了であるが、下地にはおそらく炭酸カルシウムも含むと予想できる。

なお、画面随所で黒色が使用されている。アイボリーブラック(骨炭)、墨の使用が推定されるが主成分のC(炭素)の原子量があまりに小さく、ここで採用した分析法では存在の確認ができない。

A 背景(黒)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出した。背景に使用される暗い褐色は褐色系の土性顔料であろう。見かけの色を考慮するとマルスバイオレットの可能性が高い。この顔料は耐候性が大きいので近代では壁画用に好まれる。微量でも白を加えると微かな赤味を感じさせる。下地が透けるように薄く紫褐色を塗りこんでいるので、刷毛目の隙間から見える下地の白の成分、ZnとCaが同時に検出されている。

B 帽子(白)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Pb(鉛)、Ca(カルシウム)を検出した。黄色味のある白色である。ZnOを基調とし、 $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb(OH)}_2$ (鉛白)を混合している。Feを含む黄褐色系顔料(イエローオーカー)を添加し、色調調整を行なっている。

C 髪(黒)：Fe(鉄)、Cr(クロム)、Co(コバルト)、Ca(カルシウム)を検出。目視では、やや青味を帯びた黒色に見える。Feを含む褐色系土性顔料と黒色を基調に、Crを含む緑色顔料とCoの青色系顔料を微量に混入したものと推測される。Crを含む緑色には不透明色のオキサイドクロムと透明色のビリディアンが代表的である。このほかクロム酸鉛とブルシアンブルーの混合物であるクロムグリーンも好まれた時代があるが、Pbの検出がないのでこの可能性はない。見かけの色味を考慮すると、ここで使ったのは Cr_2O_3 (オキサイドクロム)だろう。 $\text{CoO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ (コバルトブルー)を加えて色味を調えている。

D 額(白)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出した。測定箇所の絵具は、白色絵具のZnOにわずかな黄褐色系土性顔料によって色づけされている。

E 眼(黒)：Fe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出。光沢のない黒色である。炭素系黒色顔料の使用が推定される。微量の褐色系土性顔料を加えていると考えられる。

F 眼(白)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出。ZnOが基調色である。陰影に黒色と褐色系土性顔料を混入した絵具を使用し、眼球の丸みを表現している。

G 頬(肌色)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)を検出した。やや黄色味のある肌色である。ZnOとFeを含む黄褐色系および赤褐色系土性顔料の混合と考えられる。陰影部分に微量の黒色混合している。絵肌は滑らかで厚く塗られている。

H 唇(暗赤褐色)：Zn(亜鉛)、Fe(鉄)、Hg(水銀)、Ca(カルシウム)、Pb(鉛)を検出。褐色系土性顔料を基調色とし、わずかにHgS(水銀朱)を加えて赤味を与えている。

I 聖書(赤)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Hg(水銀)を検出した。鮮明な赤色である。HgS(パーミリオン)を主に、

赤褐色系土性顔料を少し加えたようだ。追加調査で、聖書の側面からAl(アルミニウム)の痕跡を検出した。パーミリオンに透明なレーキ系の赤を重ねて赤の鮮やかさを強調していることが分かる。X線写真から聖書は白い衣に重ね書きしていることが分かるので、Znは隙間から見える下層だろう。

J 聖書(褐色)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Hg(水銀)を検出した。暗い褐色を呈している。Feを含む赤褐色系土性顔料とHgSを混色しているが、I 聖書(赤)と比べ赤褐色系顔料の割合が多い。赤外線反射写真で暗く写っていることから炭素系黒色顔料の混合も推測される。

K 聖書(黒)：Zn(亜鉛)、Fe(鉄)、Ca(カルシウム)、Pb(鉛)を検出した。聖書の黒い表紙は炭素系黒であろう。軽元素のためこの分析法では確認できない。少量の白色のジンクホワイトと鉛白で微妙な濃淡の変化を付けている。

L 爪(白)：Zn(亜鉛)、Fe(鉄)、Pb(鉛)、Ca(カルシウム)を検出した。「B 帽子(白)」や「N 衣服(白)」に比べZnの検出が大きい。黄褐色系土性顔料によってわずかに色味の調整がされている。

M 手首(褐色)：Zn(亜鉛)、Fe(鉄)、Pb(鉛)、Ca(カルシウム)を検出した。赤褐色および褐色系土性顔料を基調色とし、ZnOの白色をわずかに加えている。

N 衣服(白)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)を検出した。「B 帽子(白)」よりもZnOの検出が顕著である。使用顔料帽子とほぼ同じだが、混合比を変えることで描き分けを行なっている。布のひだや陰影表現に少量の黒色を使用している。白色絵具の下層に、褐色系土性顔料(アンバー土)の層が塗布されている。

O サイン(赤褐色)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出した。色調は赤褐色レッドオーカーに近い。『一九三四 北川寫(「写」の旧字の行書体)』と描かれている。

P 背景(黒)：Zn(亜鉛)とFe(鉄)、Ca(カルシウム)を検出。「A 背景(黒)」と検出元素は変わらないが、混合する絵具の比率を変えることで、色調の調整を行なっているものと推測される。

追加調査で、白色の衣服と帽子、および手首の一部(白さが目立つ部分)の複数部分からSi(ケイ素)の存在が確認された。結晶形は未確認であるが、ケイソウ土もしくは陶土(カオリン)、シリカなどの併用が考えられるが、使用目的の考察は今後に機会を設けたい。

3. 作品の修復

以上の作品調査を基に修復方針を決定し、実際の修復作業に入った。

なお、実際の修復作業については東京藝術大学 文化財保存学専攻 保存修復油画研究室 木島隆康教授の監修のもと教育研究助手 大久保早希子先生を中心に処置を行った。

【修復前の状態】

ワニス層：紫外線蛍光写真からは判別し難い。部分的に溶剤テストを行なった結果、綿棒に少量のワニスが付着した。画面全体に光沢のムラがあり、やや黄化している。背景部分には白濁も見られる。

絵具層：全体に2~3層の絵具が重ねられ、衣服の白色は厚く盛り上げられている。亀裂や浮き上がりが生じているが、剥落は少なく固着状態は良好である。全体に彩度の低い色調で描かれている。聖書の天など部分的に鮮やかな色が用いられている。画面全体にみられる格子状の亀裂や浮き上がりは支持体の収縮に伴って生じたものと推測される。絵具層の剥落は四辺に集中しており、衣服の白色部分には亀裂が顕著にみられる。

地塗り層：薄層の白色地塗りである。張りしろ部分では、ほとんど確認できない。一部の釘頭に白色塗料が付着しているため、側面にも地塗りが施されていた可能性が考えられる。絵具層に生じた亀裂は、地塗り層を伴っている。

支持体：経糸6本、緯糸5本の目の粗い画布。天地方向は経糸である。繊維が脆く切れやすい。亀裂や冠水によってたわみが生じ、変形している。裏面には、白色の塗料が塗布されている。

木 枠：オリジナルの木枠。四辺や中棧にやや緩みがみられる。楔穴は空いているが、楔は付属していない。全体に埃や汚れの堆積が著しい。四辺に打ち込まれた釘には錆が生じている。中棧部分には「西一 松下義治」と記載されている。四辺の数カ所に釘穴が空いている。

額：裏板を固定している木ネジ(頭)が数本潰れている。下辺レリーフの一部に欠損がみられるが、状態は良好である。入れ子内にやや埃の堆積。金地の上に赤・黄・緑で彩色されている。



修復前の側光線写真

前述：側光線写真【所見】で記載したが、画面全体に亀裂が広がっていた。大きな亀裂は人物部分に集中し、細かい亀裂は人物を囲む背景に見られた。



修復前の部分写真（衣服／肩）

額装を外した際の観察では、画面四隅の外側部分（額が触れていた部分）の絵具層が剥落していた。



修復前の部分写真（画面／外側）

【修復方針】

本作品は、埃や汚れの蓄積によって汚損しており、背景部分にはワニスの白濁もみられる。また、絵具層全体に亀裂が生じている。亀裂や冠水に伴って変形がみられ、光沢のムラやワニスの白濁が作品鑑賞の妨げとなっている。

画面洗浄を行ない、これらを除去する。また、作品を安全に取り扱えるようにするため、張りしろの補強を行ない新たな麻布を接着後、木枠に張り直す。

裏面は全体に色調が暗く、汚れが蓄積している。清掃と洗浄によってこれを除去する。補彩は、充填箇所や剥落部分に最低限行ない、鑑賞しやすい状態にする。画面全体に生じている乾燥亀裂に伴う浮き上がりには膠水溶液を用いて加温し圧着する。

最後にワニスを塗布することで、光沢を整え画面を保護する。

【修復工程】

修復前の状態調査(耐溶剤テストを含む)・修復計画の立案

作品の状態を詳細に調査し、絵具層の各種溶剤に対する反応を試験し、画面洗浄剤の修復作業に使用する材料の検討を行なう。耐溶剤テストの結果を踏まえ、本作品の修復計画を立案した。

■剥落止め

膠水溶液10%で捨て膠(※1)を施す。これ以上の亀裂・剥落を抑えるため、浮き上がりの顕著な箇所に膠を差す。

劣化に伴い接着剤が吸収されやすくなった作品は、膠を差しても接着力が弱まってしまうため、吸収を抑える目的でも捨て膠を行なう。 ※1：仮止め接着と溶剤の染み込み過ぎを防ぐ



■張り代の修正

今後の修復作業を行いやすくするため、作品の張りしろの折れ癖を平滑にした。張りしろに水分を与え、加温・加圧しながら平らになるよう修正した。



■裏面清掃・洗浄

作品の裏面には汚れや埃などが蓄積すると湿気が溜まり、黴などの悪影響をもたらす可能性がある。

従って、作品を木枠から外し、ミュージアムクリーナーを用いて裏面に蓄積した埃を除去した。さらに、天然ゴムを用いて汚れを吸着させた後、精製水を含ませた綿棒を用いて裏面全体の洗浄を行なった。



■変形修正(仮枠張り込み)

今後、安全に作品を取り扱えるよう支持体四辺に新たに麻布を接着し、仮枠に張込み変形修正を行なった。



■浮き上がり接着

絵具層、地塗り層の亀裂、浮き上がり箇所^①に10%の魚膠溶液を差し、シリコンシートをあてて電気ゴテで加温接着した。



■画面洗浄

画面は経年による埃と汚れの蓄積によって暗色化や白濁が見られ、鑑賞の妨げになっていた。精製水とエタノール15% (ミネラルスピリット希釈) 溶液を用いてこれらを除去した。



■木枠張り込み

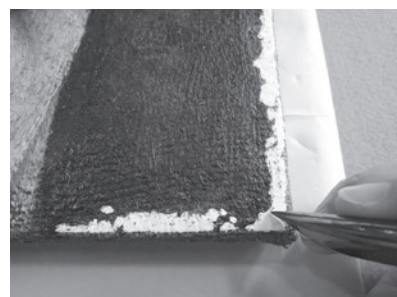
作品を安全に保管し、鑑賞しやすい状態にするため、再度木枠に張り込む。

木枠寸法に合わせて仮枠から取り外した作品を、清掃したオリジナルの木枠に張り込んだ。



■充填整形

膠水溶液13:1に石膏を混合したペーストを用いて、画面の剥落部分を充填し整形を行なった。



■下塗り補彩

充填整形した箇所、水彩絵具を用いて補彩を行なった。



■ワニス塗布

今後、補彩絵具を除去できるように10%ダンマル樹脂ワニスを刷毛で塗布した。その後、光沢ムラを均一にする目的で、5%ダンマル樹脂ワニスを刷毛撫でるように塗布した。



■補彩

作品を鑑賞しやすくするため、溶剤型アクリル絵具で欠損部分や充填箇所を周囲の色調に合わせて補彩した。



■保護ワニス

画面保護の観点から、ダンマル樹脂ワニス20%をコンプレッサーで噴霧した。また光沢を均一に整えた。



【所見】

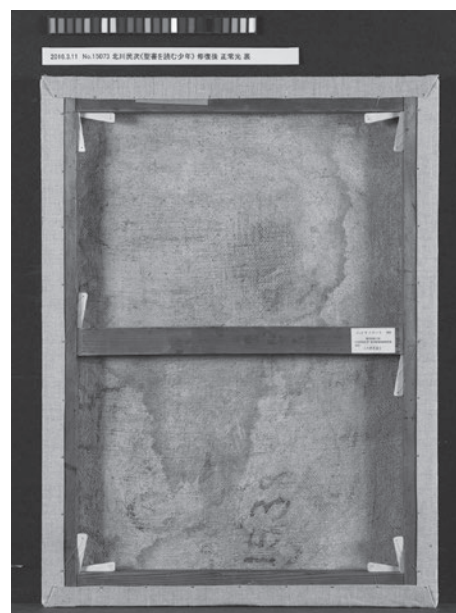
研究対象作品の修復前の状態調査では、埃や汚れの蓄積、背景部分のワニスの白濁、絵具層全体の亀裂と浮き上がり、冠水に伴っての変形、光沢のムラやワニスの白濁などがみられた。

一方で、作品全体の乾燥が少なく画面を触ると適度な柔軟性が感じられ、絵具の接着力が保たれていた。

このことは、これまでの作品調査で明らかになったテンペラ画などで使用するエマルジョン(分散液)を媒材として用いた技法で描かれていることが要因であると考えられる。

【作品全図：修復後】

修復処置後の作品の状態を記録するため、正常光写真(画面：表／裏)を撮影した。



■作品管理のための処置

作品管理のため、また本作品の修復歴を示すために、「修復完了日、研究室名、修復担当者」を記入したラベルを、画面裏木枠の中棧と額縁裏面の上辺の右側にでんぷん糊(ヤマト糊)で貼り付けた。

【作品に付加した修復材料】

商品名/製品名	使用用途	除去方法
ダンマル樹脂	保護ワニス	テレピンに溶解
ボローニャ石膏+膠水溶液	絵具層、地塗り層の欠損部充填	水に溶解
Winsor&Newton 社 透明水彩絵具	下塗り補彩	水に溶解
GOLDEN 社 MSA 溶剤型アクリル樹脂絵具	補彩	ミネラルスピリットに溶解

謝辞

本研究の遂行にあたっては、国立民族学博物館名誉教授の森田恒之先生、東京藝術大学 文化財保存学専攻 保存修復油画研究室教授の木島隆康先生、教育研究助手の大久保早希子先生および同研究室の方々に惜しめないご協力をいただきました。この場を借りて心より感謝、御礼申し上げます。

また、本研究助成についてご教示して下さった愛知県立芸術大学名誉教授の細川修先生に心より感謝、御礼申し上げます。

[参考文献]

- 久保貞次郎 編『北川民次画集』（日動画廊・飯田画廊、1974年）
『米寿記念 メキシコ時代の北川民次展』（飯田画廊、1981年）
『北川民次メキシコ時代作品集1923-1936』（さいとう画廊、1994年）
『北川民次展』（愛知県美術館・笠間日動美術館、1996年）
浅野 徹 監修 『北川民次画集』（日動出版、1997年）
『油画を読む－解剖された明治の名品たち』（東京藝術大学美術館協力会、2001年）
歌田眞介著『油絵を解剖する－修復から見た日本洋画史』（日本放送出版協会、2002年）
『北川民次館蔵全作品目録』（かみや美術館、2003年）
白河宗利 森田恒之 編『報告書 北川民次の絵画技法 作品の自然科学的調査・文献研究・再現研究』（愛知県立芸術大学、2013年）

[北川民次の著作]

- 北川民次著『絵を描く子供たち — メキシコの思い出』（岩波書店、1952年）
北川民次著『子どもの絵と教育』（創元社、1953年）
北川民次著『メキシコの誘惑』（新潮社、1958年）
北川民次著『美術教育とユートピア』（創元社、1969年）
北川民次著『メキシコの青春』（光文社、1955年／エッフェー出版、1986年）
北川民次著『北川民次美術教育論集』上・下（創元社、1998年）